

毛利文香さん応援レポート

ラ・ルーチェ弦楽八重奏団 Vol.4

2017年7月12日(水)

JTアートホール アフィニス

実力派若手演奏家達が奏でるオクテット

ラ・ルーチェ弦楽八重奏団。同世代で室内楽の楽しみを共有したいという思いから、東京藝術大学の4名と桐朋学園大学の4名、計8名のメンバーにより、2013年6月に結成された弦楽八重奏団(オクテット)。
質の高い演奏を求め、その時々で「今だからできる音楽を、全力で表現する仲間」として活動が続け、弦楽八重奏曲を中心に、五重奏以上の編成の室内楽作品をレパートリーとし、2014年から1年に1度の「La Luceシリーズ」を開催してきた。

「メンバー全員がソリスト級」と紹介されるほどの実力派若手演奏家たちが奏でるアンサンブル。メンバーには、毛利さんのほか、43回生城戸かれんさん、また、昨年12月のスカシップコンサート@紀尾井ホールで、特別出演にてヴィオラを奏でてくれた田原綾子さんも。



会場は東京・虎ノ門のJTアートホール・アフィニス。JTビルの2階という至便な立地を活かし、室内楽やリサイタルなどクラシック音楽を中心としたコンサートが開催されている。

「アフィニス」は“花たばこ”。花言葉は「ふれあい」「信頼」。また、もともとはラテン語で「親密な関係」「隣人」といった意味があるとのこと。『このホールで文化を通じてふれあいを広げたい』という願いを込めてのネーミングだそう。ホールへと続くギャラリー(2階通路)、入口を入ってのホワイエには、片山利弘氏による「自然へのまなざし」・「生命への賛歌」をテーマにした『さあ、鳥たちよ・・・』の壁画の連作。深い緑色の壁が印象的なホールである。

結成当初の目標を超える4回目公演



結成当初、3年連続の公演開催を目標にスタートしたというラ・ルーチェ弦楽八重奏団。その目標を超える4回目となった今年の公演では、さらに先を目指す気持ちを表したかのような重厚なプログラムが用意された。

8人が登場し演奏会が始まる。
全員が黒の衣装、シックないでたち。

始まりはショスタコーヴィチの八重奏曲。深みのあるテーマではじまり、不協和音にも聴こえる重苦しい重奏。弦楽八重奏ならではの、厚みがあり迫力満点の音色が会場を圧倒する。

2曲目、ブラームスの五重奏曲。第1ヴァイオリンは城戸かれんさん。美しい旋律。溢れ出るようなエネルギーを感じた。

休憩後、女性陣は衣装を替えて登場。今年は淡い色で統一。華やかさに会場の空気も変わる。

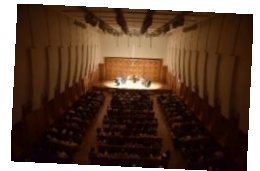
3曲目は、これまでも、ラ・ルーチェのために熱い編曲を提供してくれてきた山中惇史さんの編曲による「Piazzollina」。ピアソラの曲3曲を組曲にアレンジした作品である。



組曲の始まりは「Libertango」。ぞくぞくするような堂々の演奏。今やラ・ルーチェの十八番ともいえる曲である。過去の動画をYoutubeにアップしたら大反響。海外からも「楽譜はどこで入手できるのか？」との問い合わせがあったほど。次の曲は「Tanti anni prima」。『昔むかし』という意味を持つタイトルどおり、せつなく、懐かしさを覚えるような曲想。3曲目は「Escualo」。ジャズっぽくもあり、洒落た趣もあり、不思議なリズム。

見事な編曲、見事な演奏。客席にいらした山中さんが舞台に呼ばれると、ふたたび満場の拍手が贈られた。

そしてラストを飾ったのはオクテットの名曲メンデルスゾーンの八重奏曲。第一ヴァイオリンは毛利さん。ふくよかに、瑞々しく、きりと聴かせてくれた。8本の息もぴったり、よく揃い、よく歌い、馴染みよく心地よい8重奏に大きな拍手とブラヴォーの声が飛んでいた。



アンコールには、ふたたび「Piazzollina」から「Escualo」。のびやかに重なる音の美しいこと。8人による重奏を堪能して幕が閉じた。

1年ぶりに聴かせてもらったラ・ルーチェのオクテット、さらに厚みと迫力を増した演奏に、メンバーのこの1年の研鑽と足取りが滲み出ているかのようなだった。



写真: ©木村敬一氏 このページのもの全て

ずっと続けていきたい仲間達。来年は記念すべき5回目！



終演の数日後、毛利さんに話を聞いた：

ー今回はどんな演奏を心掛けて？；

「・・・今回は盛り盛りのプログラム。結成から4年。留学したり、活動の場が広がったり、みんなの状況もいろいろ変化しています。音楽の指向も変わるなど面白い局面です。それぞれの勉強の成果が出せたらいいなと。また、4年目になり、団結力みたいなのが高まってきているので、そうした面をお伝えできたらいいなと思って臨みました」

ー第1ヴァイオリン(1stVn)を務めたラストのメンデルスゾーン、重奏もよく揃い、素晴らしい音色でした；

「・・・メンデルスゾーンは、今回で3回目の披露となります。なかなか弾く機会がない曲ですが、今年はみんな、パート(第1・第2・・・)を変えての挑戦でした。他のパートも知っているというのは、曲を仕上げるという意味でプラスですし、これまでに、何度となく弾いているので、それだけ皆、身体に沁み込んできているというのものもあるかもしれません」

「・・・(1stVnなので)自分の音を出しつつ、周りをうまくまとめていくというか、いい意味で巻き込むようなことができたらいいなと思いつながら弾きました」

「・・・盛りだくさんなプログラムのうえに、今回自分はラストの曲で第1ヴァイオリン。メンデルスゾーンの1stVnはソロもあるなどコンツェルトのようなところもあり、体力を残しておかないと、最後はへとへとになってしまいます」
「・・・室内楽の場合も、本番は皆と全力で弾くので、持久力の温存の仕方というか、エネルギーの配分の仕方を考えなければと気付かされた公演でした」。小・中学校時代は水泳で鍛えたという毛利さん、『体力配分』というキーワードを挙げていた。

2日後の14日には大阪のザ・フェニックスホールにて「ラ・ルーチェ弦楽八重奏団 ティータイムコンサート」。東京公演での経験と反省を活かし、最後まで8人で楽しみながらの演奏だったようだ。

<演奏会概要>

◆出演

ラ・ルーチェ弦楽八重奏団

大江 馨(ヴァイオリン)	城戸かれん(ヴァイオリン)
小林 壱成(ヴァイオリン)	毛利文香(ヴァイオリン)
有田 朋央(ヴィオラ)	田原綾子(ヴィオラ)
伊東 裕(チェロ)	笹沼 樹(チェロ)

◆プログラム

ショスタコーヴィチ：

弦楽八重奏のための2つの小品 作品11

ブラームス：弦楽五重奏曲 第2番 ト長調 作品111

山中惇史編曲：Piazzollina

ピアソラ「Libertango」「Tanti anni prima」「Escualo」

メンデルスゾーン：弦楽八重奏曲 変ホ長調 作品20

◆アンコール曲

A.ピアソラ/山中惇史編「Piazzollina」より：「Escualo」



「・・・本当に刺激をもらっています。ずっと続けていきたい仲間達です」
来年は5回目という節目の年。また練ったプログラムで楽しませてくれることだろう。

毛利さん、素敵な演奏でした。
また聴かせてください！



写真：©木村敬一氏
(全体写真2枚とも)

